

私の戦争体験

武田 功

私が生まれたのは1941年12月、岩見沢市の郊外駅から3キロほどの水田地帯である。真珠湾攻撃の4日後で、大本營の発表で世間は沸いていたらしいが、後の評価は窮地挽回の奇襲策だったようだ。

そして2年後の6月二女が生まれたが、父（養蔵）には召集令状が来ていた。近くの神社で親戚や近所の人が集まって壮行会が行われた。母は赤子を背負い両手に幼子の手を握り見送ったという。

後に祖父は、「ヨンゾ（養蔵）の挨拶は『行きます』としか言わなかったな。普通は『行って参ります』とか『元気に行って来ます』とか言うのにな。」と何度も聞いた。「きっと帰って来れない覚悟だったのかな」とも言っていた。

海軍に召集されて、横浜でハガキをよこした父からその後便りが来ることはなかった。

敗戦後、役場の方が何度か戦死を告げに来たが、母は「もっと捜して」と受け入れなかったと言う。しかし、1947年夏、骨はおろか髪の毛一本ない白い箱を受入れざるを得なかった。姉妹と3人田んぼで遊んでいる時そんな光景を見たように思う。

農家仕事も終わった冬、狭い我が家で葬式をしたが、ずっと泣きどうしだった母、子ども3人を伴っての焼香の時は声をあげて泣いていた。

無学な母だったが戦争への憎しみは旺盛で「功、戦争だけはだめだ」が口癖だった。そんな母も2007年91歳で亡くなり、父が戦死したと思われる海に散骨・旅発って逝った。やがて自分もと思うこのごろである。

戦後私たちは平和憲法を手にしたが、憲法9条の精神は『戦争に勝つのではなく戦争はしないのだ』だと思う。戦争の犠牲者はいつも庶民なのだから。

世相を一句 「行きます」と 告げて帰らぬ あの時代

またも来そうな 政（まつりごと） いさお